



核戦争を防止し平和を求める

茨城医療人の会 会報



発行：核戦争を防止し平和を求める
茨城医療人の会

〒300-0045 土浦市文京町 1-50
富士火災ビル 3階 茨城県保険医協会気付
TEL029(823)7930 FAX 029(835)0737
E-mail iryozin@doc-net.or.jp
http://www.j7.dion.ne.jp/~iryozin

第29号の 主な内容

- 子ども被災者支援法の基本方針閣議決定への抗議声明 …①
- 日本政府の「核不使用声明」への賛同を歓迎する …②
- 「はだしのゲン」閲覧問題で思うこと …③ 少年と犬 …④

政府は2013年11月11日、東京電力福島第一原発事故の避難者らを援助する「子ども・被災者支援法」の基本方針を閣議決定しました。「支援対象地域」は福島県内の33市町村とし、それ以外の地域は除染や健康診断など個別の施策ごとに「準支援対象地域」を設定するとなりました。一方、福島県などが求めている18歳以下の医療費無料化の継続的な財政措置は盛り込まれませんでした。この閣議決定に対して、核戦争を防止し平和を求める茨城医療人の会は次のような抗議声明を内閣総理大臣と復興庁、茨城県、報道機関に送りました。

福島原発事故に関する子ども被災者法の 基本方針閣議決定への抗議声明

ー茨城県内の核関連事故後の対応から見た支援法の異常さー

2013年11月18日 核戦争を防止し平和を求める茨城医療人の会

福島事故後の子ども被災者支援法に対するパブコメでは、福島県内の一部に対象範囲を限定した政府の意向に対し、多くの自治体から反対のコメントが寄せられる異例の事態となった。この基本方針は、先日閣議決定されたが、福島事故に対する政府の最近の対応は、かつて国内であった核関連施設での事故対応の原則とも、かけはなれた異常なものである。

1999年、茨城県東海村でおきたJCO社の臨界事故では、亡くなられた2人以外に、他のJCO社員や救急隊員、施設周辺の住民にも、広く被ばくが及んだ。茨城県は、事故後の国から県への交付金を利用し、① 事故によりばされた線量が1mSvを超える住民 ② 事故時の避難要請区域内の住民を対象に、年に1回の無料健診事業を現在まで行ってきた。しかしながら、福島事故後の県民健康調査では、福島県内の小児甲状腺疾患のみを対象とすることが最初から既成事実とされた。悪性腫瘍や血管障害といった放射線の健康影響が成人で多いことや、現在の空間線量を定める放射性セシウムの飛散とは異なり、放射性ヨウ素は南風によって茨城県内にも広く飛散したことなどは、全く無視されてきた。

また、1997年に東海村のアスファルト固化施設でおきた火災事故では、事故発生に伴って生じた、空間線量が1.3mSv/3ヶ月(5.2mSv/年)を越し成人しか就業できない「管理区域」の拡大と、事故収束後の「管理区域」縮小・原状復帰が、法律の基準に基づいて順次行われた。子ども被災者支援法では、国の避難指示基準(年間累積線量20mSv超)に達していない地域での多様な支援促進が立法理念の一つだが、最近、「避難指示解除準備区域」(年間累積線量20mSv以下)での帰還が促進され始めたのは、個人の選択権の尊重が根底にあったとしても、アスファルト固化施設での事故対応からみると異常である。

については、私達は、かつて幾つかの核関連施設の事故を経験した茨城県内の医療者の団体として、茨城県、政府及び関係諸機関に対し、下記事項について抗議するとともに、速やかな事態の改善を要望する。

- 一、福島原発事故により、南東北・北関東を中心に広い範囲の住民が1mSv以上の過剰被ばくを受けた。JCO事故後の健診の原則から考えると、被災者支援法の対象範囲は、当然これらの地域を含まねばならない。また、放射線の健康影響が、発癌や血管障害など、成人に多い疾患であることを考えれば、広い年齢層も含む健診が望ましいのは当然である。茨城県内においては、公費による小児の甲状腺検診を実施するとともに、JCO事故後の検診事業に準じ成人病健診を充実して無料で実施すべきである。
- 二、住民の帰還にあたっては、過剰な放射線被ばくに関し、関連情報を十分開示したうえで、個人毎に被ばくの正当化と最適化を徹底して行わねばならない。さらに、アスファルト固化施設での火災事故等でも設定された法的な「管理区域」基準に基づき、空間線量1.3 mSv/3ヶ月(5.2mSv/年)を越す地域では除染を優先するべきである。居住に関する個人の選択権を尊重するのは当然だが、上記の基準以下に空間線量が減少しない限り、帰還事業は原則して促進されるべきではない。

福島事故後の様々な対応に際しては、過去の茨城県内の核関連施設の事故対応で、曲がりなりにも示されてきた幾つかの原則が、最初から無視されてきたのは甚だ遺憾である。もし、事故の規模の違いを言い訳にし、費用負担の増大を心配して過去の事例を無視した対応をとっているとすれば、けっして許されるものではない。



日本政府が国連の「核不使用声明」に賛同したことに対して、核戦争を防止し平和を求める茨城医療人の会は、これを歓迎する声明を発表し、内閣総理大臣、外務大臣に送りました。

日本政府の「核不使用声明」への賛同を歓迎する

2013年11月1日

核戦争に反対し平和を求める茨城医療人の会
会長 櫻井 保之

軍縮などを議論する国連総会第1委員会が2013年10月21日、「いかなる状況下でも核兵器が再び使用されない」との文言を盛り込んだ「核兵器の人道上的結末に関する共同声明」を発表、日本を含む125カ国が賛同した。従来、アメリカの「核の傘」に依存する立場から、「いかなる状況下でも」との文言に賛成できないとしてきた日本国政府が賛同したことを歓迎するものである。

日本国政府は、これまで「いかなる状況下でも」という文言にこだわり、「核兵器の非人道性を訴えた共同声明」に署名してこなかった。この日本国政府の対応に対して、広島、長崎の被曝者を始め、核のない世界を求める多くの国々の国民、内外の反核団体から、抗議の声があがっていた。今回の日本国政府の署名は、これらの運動の成果と言える。

ただ声明には「核軍縮に向けたすべてのアプローチと努力を支持する」という一文が盛り込まれ、これに対して「拡大抑止を含む日本の今までの考えが入った」「段階的に核軍縮を進める日本の取り組みと整合性が取れていることが確認できた」と菅官房長官が述べるなど、日本政府の立場は未だに米国の「核抑止論」の立場を捨てておらず、声明の基本的考え方と矛盾したものになっている点を指摘したい。核抑止の立場に立つ限り、核兵器は永久に廃絶できない。日本政府は直ちにこの立場を捨てるべきである。

いま世界では、核兵器の廃絶に向けて核兵器禁止条約の国際交渉の開始が求められている。日本政府は

声明に名を連ねた以上、唯一の被爆国の政府として同条約の交渉開始を含むあらゆる核廃絶運動で一層のイニシアチブを取ることを求めるものである。

以上

寄稿

「はだしのゲン」閲覧問題で思うこと

一戦争体験2世は戦争をどう語り継げばよいのか

石岡第一病院口腔外科 萩原 敏之

「はだしのゲン」閲覧制限が撤廃されたというニュースが流れた。当たり前と言えば当たりの話だが、どうしてこうなってしまったのだろうか？ 制限を加えたのはおそらく戦争を直接知らない方々だったと思う。昔日本軍が「首切り」をしていたのは事実だし、それを子どもにかくすことは事実がだんだん歪曲されていかないかと心配になる。

私は56歳の戦後生まれで戦争を知らない、いわゆる戦争体験2世代である。私は小学生のころ家にあった大東亜戦争の写真の中で、今でも覚えている2枚がある。1枚は日本陸軍の兵隊が中国人の首を切った瞬間の写真である。兵隊の日本刀が振り下ろされ中国人の首が飛んだ一瞬をとらえたものだ。その晩は興奮して寝られなかった覚えがある。また、それに重なっているのが、そのころ教わっていた小学校の先生の戦争体験話である。その先生は上官の命令で中国人の首を切った経験があった。こんなやさしい先生がどうして人の首を切れるのか、と何とも不思議なフワッとした感覚を感じた。あの写真の記憶と重なって、今もって戦争とは何か私の胸元に突き付けられている。

もう1枚は、横浜大空襲後の丸焼けでごろごろ転がっている死体の写真である。私の母は横浜生まれで、戦争中助教をしながら警官の祖父と共に横浜にいた。大空襲の生き残りで、物心つく頃から空襲の話をしてくれた。死体をまたいで街の中を彷徨したこと、草っぱらを積みながら飢えをしのいだこと、防空壕で暮らしていたこと、などなど。そして防空壕暮らしでリウマチ熱にかかりろくな治療も受けず、それがもとで心臓病となり14年間の闘病生活の上、30年以上前に死んだ。戦争さえなければ天寿をまっとうしたかもしれない。もっとも戦争がなければ戦後田舎に引っ越すこともなく、茨城生まれの私の父と出会うこともなかったであろう。私が生まれたのも皮肉なことに戦争のおかげだ。

わたしの父は予科練甲飛13期生で、特攻しそこなった生き残りだ。父の話には戦争そのものの悲惨な話はない。飛行訓練中に敵機と出あってあわてて逃げ帰ってきたなどという今になれば笑い話のような話と、厳しかった軍隊暮らし程度しか聞いていない。父の腰に今も残る海軍精神鍛錬棒の傷跡で軍隊暮らしを垣間見ることができる。

小学校の先生、母、父、この三者三様の話が、少年だった私の心にずっと重なり合って今となった。この話は、ずっと薄まって私の息子に伝えられた。たぶん私がこの話を聞いた時も、本人たちが伝えたかった分の何分の1かに薄まって伝えられたのであろう。戦争は私たちの親の世代には確かにこの世にあった。

だんだん昔話になっていく戦争が、ふたたびこの世に戻って来ないように、われわれ戦争体験2世代も知る限りの戦争を語り継ぐべきだと感じた、このごろのニュースである。

寄稿

少年と犬

(福島原発事故によせて—2)

鶴 文乃

散歩に行くと、ぐいぐい僕を引っ張ったシェパードのマーク
シャープな顔立ちと背中にすいっと通った黒い毛並み
まるでウルフのようだった
僕が叱られて泣いていると、ぺろぺろと涙をなめてくれたやさしい犬

川底の石ころが透けて見える川面に、雪解け水が流れ込み
川岸に柔らかな新芽が出始めた、2011年3月11日午後2時46分
大地が揺れて、原子力発電所が壊れた

僕は悲しい別れをひたすら隠して
笑顔でマークの鎖を解いてやった
うれしそうに走り回っていたお前
気がついたら、空っぽの家
捨てられたマーク

あれから、お前は何を食べてどこに居るのだろう
この一年半、お前のことを忘れたことはない
頼むから何とか生きていてくれ
今度巡り合った時、お前が怒り狂って狼となって、僕に歯向かってきたとしても
それは仕方がないこと

とにかく、僕はマークの居る故郷に帰りたい
それが叶うなら、エアコンも電子レンジもテレビもいない
例え不便な原始の生活になっても、僕はかまわない

そして、きれいになった空気を胸いっぱい吸って
マークと一緒にあの野山を駆け巡りたい
その時まで、マークよ、生きていてくれ！

(置き去りにされた犬たちを見て、2012年9月28日記)

